林道増山城跡線拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告書

富山県　砺波市

増山城跡発掘調査報告

EXCAVATION REPORT OF THE MASUYAMA-JOSEKI

２００３年３月

砺波市教育委員会

『富山県砺波市増山城跡発掘調査報告
—林道増山城跡線拡幅工事に伴う発掘調査報告書—』正誤表

頁・項目	行	誤	正
例　言	14	平成12年3月25日	平成13年3月25日
〃	30	宮田信一	宮田進一
P6・表1	34	長尾義景塚	長尾能景塚

お手数をおかけしますが、上記事項の変更を宜しくお願いします。

砺波市教育委員会

カラー図版１　遺物集合写真

序

砺波市は、富山県西部の砺波平野のほぼ中央部、大部分が庄川により形成された扇状地上に位置しています。砺波市は、将来の都市像を「散居に広がる　快適都市　となみ」とし、まちづくりの基本理念を「人すこやか　心なごやか　緑さわやか」と定め、文化遺産である散村の保護・活用を図るとともに自然との調和をもとめ、住民が安心して暮らせる住みよい都市をめざしています。

さて、砺波市には、魚津市の松倉城、高岡市の守山城とならび越中三大山城のひとつに数えられる増山城跡が存在しています。昭和40年に県の史跡に指定され、また増山城跡県定公園として市民の憩いの場となっています。

このたび林業地域総合整備事業として、地元住民の悲願であった林道増山城跡線の改良工事を実施する運びとなりました。出来る限り埋蔵文化財の保護に努めてまいりましたが、一部記録保存を必要とし、増山城跡の本発掘調査を実施することになりました。

今回の調査では、これまでの増山城跡総合調査では得られなかった新発見が相次ぎました。増山城と亀山城の間に位置する谷から中世の郭が存在することが判明し、大型の柱穴で構成された掘立柱建物が検出されました。また、中世郭の下層から古代の竪穴建物が存在したこと、そして市内の発掘調査において初めて弥生土器が発見されるなど、砺波市の歴史を解明する上で、そして県内の中世城館研究において欠くことのできない貴重な資料が得られました。その成果をまとめた本書が地域の歴史や文化の研究にご活用いただければ幸いです。

おわりに、調査の実施及び報告書刊行にあたり、地元増山地区・梅檀野地区・富山県埋蔵文化財センターをはじめ関係各位に多大なるご援助・ご協力をいただきました。衷心より感謝申し上げます。

平成15年３月

砺波市教育委員会

教育長　堀田良男

例　　言

1．本書は平成14年度に行った富山県砺波市増山に所在する増山城跡の発掘調査報告である。

2．発掘調査は、砺波市増山地内に所在する林遺増山城跡線の緊急事業に先立ち、砺波市教育委員会が実施した。

3．調査事務局は砺波市教育委員会内に置き、事務は学芸員野原大輔が担当し、生涯学習課長老松邦雄が総括した。

4．調査に関するすべての資料は砺波市教育委員会で保管している。なお、遺跡の略記号は市名と遺跡名の頭文字（Tonamisi Masu Yama Joseki）と、平成14年度の調査となることから「TMYJ－14」とした。

5．調査事務局及び調査担当者は以下のとおりである。

調査事務局　砺波市教育委員会		教育次長	喜田　豊明
	生涯学習課	課　長	老松　邦雄
	同	係　長	喜田　真二
試掘調査担当者	同	学芸員	利波　国裕
本調査担当者	同	学芸員	野原　大輔

6．調査期間及び面積は以下のとおりである。

第１次試掘調査　平成13年３月23日～平成12年３月25日　　調査対象面積910㎡、調査面積10㎡

第２次試掘調査　平成13年11月29日～平成13年12月18日　　調査対象面積910㎡、調査面積約40㎡

平成14年５月７日～平成14年６月21日　　調査面積250㎡

7．本書の執筆・編集及び図版作成は、野原が行った。

8．巻頭カラーに掲載した遺物集合写真は、福岡町教育委員会の栗山雅夫氏に撮影していただいた。

9．本書で使用している遺構の略記号は以下のとおりである。

竪穴建物－ＳＩ、掘立柱建物－ＳＢ、井戸－ＳＥ、周溝遺構・土坑－ＳＫ、溝－ＳＤ、ピット－ＳＰ

また、本書で使用している方位は真北で、標高は海抜高である。

10．土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(2001年前期版)に準拠している。地形分類の範囲及び名称は『土地分類基本調査』[経済企画庁：1970]・『10万分の１富山県地質図説明書』[富山県：1992]を参考にしている。

11．出土した炭化物の年代測定および樹種同定は、株式会社中部日本鉱業研究所（富山県高岡市）に業務委託した。

12．調査補助員及び整理作業員　　高木美奈子（砺波市教育委員会　生涯学習課）

13．調査期間や整理作業期間を通じて、下記の方々から多大なるご教示・ご協力を得た。記して衷心より謝意を表する。

安念幹倫（富山県教育委員会）　　池野正男（富山県埋蔵文化財センター）

酒井重洋（財団法人富山県文化振興財団）　　久々忠義（小矢部市教育委員会）

栗山雅夫（福岡町教育委員会）　　西井龍儀（富山考古学会）

松本修自（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター）　　宮田信一（富山県埋蔵文化財センター）　　以上、五十音順・敬称略

14．発掘調査・整理作業参加者は次のとおりである。

発掘調査　老松邦雄、竹林秀明、野原礼子、境　庸子（以上、砺波市教育委員会 生涯学習課）

荒木久平、天野秋一、石田孝之、今泉　進、永森　旭、河原義夫、鳥田一郎、高島　子、田中忠治、

西村昌蔵、倉田正明、福島要蔵、安ヶ川礼子（以上、社団法人 砺波市シルバー人材センター）

整理作業　根田勝子、前田紋子（社団法人 砺波市シルバー人材センター）

目　　次

序　文

例　言

目　次

序　章

第1節　調査に至る経緯 …… 1

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境 …… 5

第2節　歴史的環境 …… 6

第3章　調査の成果

第1節　調査方法と調査経過 …… 9

第2節　基本層序 …… 9

第3節　遺　構 …… 10

(1)上層（中世）遺構面　①掘立柱建物　②周溝遺構　③井戸　④土坑　⑤ピット …… 10

(2)下層（古代）遺構面　①竪穴建物　②炭焼き穴 …… 17

第4節　遺　物 …… 20

第5節　自然科学分析 …… 25

第4章　考　察 …… 29

第5章　まとめ …… 31

参考文献

【図版目次】

第1図　平成13年度試掘調査トレンチ断面図
第2図　本調査区・試掘調査区位置図
第3図　増山城跡全体図
第4図　増山城跡とその周辺の遺跡
第5図　基本層序模式図
第6図　上層（中世）遺構全体図
第7図　調査区断面図
第8図　遺構図(1) SB01（SK04・08・09・13）
第9図　遺構図(2)　SK01・SP01
第10図　遺構図(3) SP03・04・07・08・SK03・07・SE01
第11図　下層（古代）遺構全体図
第12図　遺構図(4)　SI01・02・03
第13図　遺構図(5)　SK10・14
第14図　遺物実測図(1)　遺構出土遺物
第15図　遺物実測図(2)　包含層出土遺物
第16図　遺物実測図(3)　包含層出土遺物

【表目次】

表1　増山城跡とその周辺遺跡一覧表
表2　遺物観察表

【写真図版目次】

カラー図版　出土遺物集合写真
図版1　空中写真
図版2　遺構(1)
図版3　遺構(2)
図版4　遺物(1)
図版5　遺物(2)

序　章

第1節　調査に至る経緯

平成10年度、砺波市は「林業地域総合整備事業」の一環として林道増山城跡線（以下、林道と称す）の整備計画を策定した。「林業地域総合整備事業」は、「森林法」のなかの「森林林業基本法」に基づいた事業であり、砺波市農林課では林野庁・富山県治山課と協議のうえで平成13年度から事業を進めている。今回の道路改良では昭和20年代に敷設したこの林道を幅員４mに拡幅する計画である。総延長1000mの総舗装で、総事業面積は4000㎡にのぼる。総施工期間は、平成13年度から平成15年度となる。

林道は、県指定史跡であり周知の埋蔵文化財包蔵地である増山城跡の範囲内に位置することもあり、事業計画策定当初から可能な限り埋蔵文化財の現状保存を図る方針で協議が進められてきた。

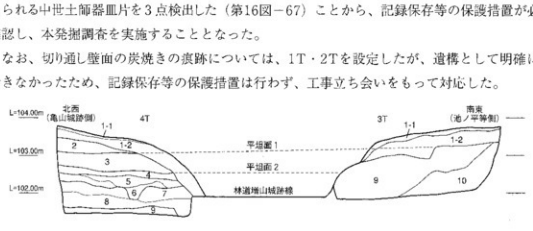
平成11年度、市教育委員会は市農林課から事業照会を受け、事業予定地内における埋蔵文化財の有無についての確認を行っている。協議のなかで現地を訪れた際、亀山城付近の切り通しの壁面に炭化物の集積を発見、それらを試掘調査計画に含めることを確認している。

平成11年６月と平成12年６月の二回にわけて砺波市文化財保護審議会（新藤正夫会長）は、工事範囲周辺の現地視察を行った。このとき、西井龍儀委員から、先の炭化物集積は炭焼きの痕跡の可能性が高いことと、通称「小判清水」付近に林道を挟んで地形的に平坦な部分があり増山城跡との関連があるのではないかという指摘があった。その地形が山城を構成する郭の可能性があることから試掘調査の対象範囲に含めることとなった。

平成12・13年度にかけて市教育委員会は、試掘調査を実施した（第２図）。平成12年度の試掘調査では、林道に平行して１本のトレンチを設定し、人力により掘削したが、遺構・遺物は検出されなかった。

平成12年度の試掘調査であまり成果が得られなかったことから、追加調査ということで平成13年度に２回目の試掘調査を実施した。平成12年度の調査箇所に直交する位置にトレンチを設定（3T・4T）、バックホウによる掘削を行った。結果、明確な遺構は確認されなかったが、トレンチ断面に平坦に堆積する層位が存在することが判明、人為的に構造物を造りだしている可能性がでてきた。加えて排土中から16世紀後半頃のものと考えられる中世土師器皿片を３点検出した（第16図－67）ことから、記録保存等の保護措置が必要であることを確認し、本発掘調査を実施することとなった。

なお、切り通し壁面の炭焼きの痕跡については、1T・2Tを設定したが、遺構として明確にとらえることができなかったため、記録保存等の保護措置は行わず、工事立ち会いをもって対応した。



第１図　平成13年度試掘調査トレンチ断面図　Scale=1／100

第2図　本調査区・試掘調査区位置図　Scale=1／500

平成12年度試掘:1T(H12),平成13年度試掘:1T(H13)～5T(H13)

第3図　増山城跡全体図　Scale＝1／3000

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

増山城跡の所在する砺波市は、富山県の西部中央にある。面積は96.31㎢、人口41618人（平成15年1月31日現在）であり、東経136度54分～137度04分、北緯36度33分～36度41分に位置している。

砺波市は、市名の由来ともなっている砺波平野に広がっている〔佐伯：1979〕。砺波平野は、大部分が市東部を北流する庄川により形成された扇状地が占めている。庄川は、その源を岐阜県荘川村に発し、高岡市を経由して日本海に注ぐ。流路延長115㎞、流域面積1180㎢、平均河床勾配1/120～1/800の規模をはかる〔富山県：1992〕。

庄川扇状地は県内の三大扇状地に数えられ、そのなかでも最大の規模を誇る。扇頂部である庄川町青島から扇端部である高岡市南部の湧水帯までの距離は13～15㎞、面積は146㎢に及ぶ。庄川扇状地には、地理学上著名な散村（Dispersed Settlement）が広がっている。また、大日本帝国陸地測量部が明治43年に発行した2万分の1縮尺の地形図『出町』『長澤』をみると、庄川の変遷を示す河道の痕跡が放射状に残っているのが確認できる。また、庄川扇状地の勢いに押されるようにして小矢部川は、庄川の排水河川の役目を果たし砺波平野の西端部を流れている。

庄川の右岸には台地がひろがり、河川作用によって形成された河成（河岸）段丘が存在している。それらは低位段丘、中位段丘、高位段丘として分類することができる。庄川町庄から宮森までの主要地方道新湊庄川線以東には、低位段丘が存在しており、隆起扇状地堆積物が形成されている。頓成・権正寺・東保では、庄川右岸に沿う帯状の自然堤防の微高地上に集落が発達している。

高位段丘にあたる芹谷野段丘（福岡段丘）は、旧扇状地の右扇の一部が残存し段丘となったものである。南は安川付近から北は大門町串田付近まで約10㎞に広がり、福岡の巌照寺周辺では海抜80mを測る。芹谷野段丘上は、近世に庄川から芹谷野用水が引かれ、集落が開けた。

芹谷野段丘の東、蛇行する和田川の両岸には中位段丘が形成されており、和田川流域段丘帯をなしている。和田川は、牛岳の北西側山中に源を発し、庄東山地と芹谷野段丘の間を大きく蛇行し、池原付近で坪野川が合流する。流路延長23.5㎞、庄川の支流である。昭和43年、和田川総合開発事業により和田川ダムが竣工、和田川は堰き止められて増山湖ができた。

和田川の右岸に位置する増山城跡は、一般に庄東山地・音川山地と呼称される範囲に含むことができ、富山県を東西に分断する射水丘陵帯の一枝群を成している。この山地は起伏量が少ない丘陵性小起伏山地であり、地質的には青井谷シルト質泥岩層の範囲に含まれる。

また、南に位置する東別所新山山地は標高200m余りを最高点として100m余りの小起伏山地で構成されている。この山地の西北に位置する天狗山（標高192m）の北斜面、県民公園頼成の森の緩斜面丘陵は、南側山地からのかつての扇状地性堆積層で構成されている。表層地質としては、砂岩を主体とする下部と無層理青灰色泥岩を主体とする上部から成っている。

第2節　歴史的環境

砺波市には127箇所の埋蔵文化財包蔵地が存在する（2002年12月27日現在）。ここでは増山城跡（1）を中心として市内の遺跡について概観する。

あけぼの　旧石器時代の遺跡は、庄川右岸の音川山地や芹谷野段丘に分布する。音川山地には芹谷遺跡(27)・池原遺跡(28)・増山外見喰山遺跡・頼成D遺跡(25)、芹谷野段丘には高沢島Ⅰ・Ⅱ遺跡(6)などがある。市内において旧石器が注意されたのは、昭和48年頃の芹谷遺跡がはじめてであり、住蔵久雄氏の業績による。氏の発見以来、100点以上の石器が表面採集され、それらは「立野ヶ原型ナイフ形石器」と呼ばれる鉄石英・玉髄でできた小形剥片と、濃飛流紋岩類・容結凝灰岩によるナイフ形石器や彫器で構成されるという。〔西井：1990〕

縄文線乱　旧石器と分布を同じくし、縄文文化の花がひらいた。高位段丘である芹谷野段丘では、上和田遺跡(24)（中・晩期）、厳照寺遺跡(20)、宮森新天池遺跡(23)、宮森新北島Ⅰ遺跡（16）（前・中・晩期）、頼成新遺跡、三谷遺跡がある。また、中位段丘である和田川流域段丘帯には、高沢島Ⅰ・Ⅱ遺跡(6)、増山遺跡(4)などがある。市内における縄文時代の遺物は古くからその存在が知られ、大正13年頃、孫子の上原地内において県内でも稀少なバナナ形石器が出土している。中尾遺跡から出土した御物石器は、前田円蔵氏が所蔵しており〔梅檀山村史刊行会:1976〕、現在福岡の厳照寺にて保管され市指定文化財となっている。

芹谷野段丘縁辺の福岡・宮森新にまたがり存在する厳照寺遺跡(20)は、市内の縄文時代遺跡として最も著名である。名越仁風氏ら地元研究家や富山考古学会の働きかけで周知されるようになった厳照寺遺跡は、梅檀野地区圃場整備事業に先立ち昭和50・51年に試掘調査、昭和51年に本調査が実施された。本遺跡から出土した土器群は、現在「厳照寺Ⅰ式・Ⅱ式・Ⅲ式」として、それまで呼称された新崎式に代わり中期前葉の標式となっている。遺構では、竪穴住居跡11棟・埋甕1箇所・穴などが検出され、典型的な弧状集落であることが判明した。

低地では庄川以東の低位段丘上に宮森遺跡（15）、徳万遺跡（32）、東保石坂遺跡(10)など、芹谷野段丘を抉る谷口に存在する。しかし、平成14年度に砺波市教育委員会が実施した久泉遺跡(40)の試掘調査では、扇央部において初めて縄文時代遺跡を発見するという新たな動きもみられる。

空白の時代　弥生時代・古墳時代は、現在のところ砺波市においては空白の時代と言わざるをえない。社会基盤が稲作経営に移行したことに連動し、人々が扇状地でも湧水帯の多い扇端部に移り住んだことに起因するものと思われる。池原には"丸山古墳"や県指定史跡であった"狐塚古墳"があり、前方後円墳と目されていたものの、現在指定は解除され、古墳と見る研究者は少ない。わずかな資料として、福山大堤遺跡や安川野武士遺跡B地点出土の土器片が該期の可能性があるものとして知られる。古墳時代資料としては、高沢島Ⅲ遺跡(7)の例があげられる。土師器の甕や高杯の一部が出土しており、古墳時代でも後半のものと考えられる。また、増山城跡(1)の又兵衛清水付近から内面に刷毛目調整を施した土師器片が出土している。〔安念:1991〕

古代の風　飛鳥・白鳳時代も資料はなく、奈良時代に入ると庄川扇状地の扇央部や芹谷野段丘などで遺跡が分布しはじめる。庄川扇状地東側に展開したとされる東大寺領墾田の石栗荘・伊加流伎荘・井山荘と密接な関わりがあることは想像に難くない。それら各荘の年代と合わせるように梅檀野窯跡群が操業をはじめる。梅檀野窯跡群の増山支群である宮森窯跡(14)と、福山支群である安川天皇窯跡が8世紀半ばに須恵器生産を開始している〔西井:1994〕。8世紀後半になると、増山支群では増山亀田窯(5)、増山閉子地窯(3)、増山妙覚寺坂窯(8)、福山支群では福山窯、福山小堤窯、福山大堤窯が操業している。この後、梅檀野窯跡群では、10世紀ごろまで須恵器生産が続けられるようである。

なかでも砺波郷土資料館で収蔵している福山須恵器窯跡出土品は、市指定文化財となっている。昭和37年7月に砺波市史編纂委員会が中心となり〔砺波市史編纂委員会ほか:1962〕、発掘調査を実施した。出土品のなか

には、水煙・屋蓋・輪・基檀など瓦塔の一部や円面硯、土馬など特記すべきものが多数ある。

しかし、須恵器生産窯跡の数に対して、供給地となる遺跡の数は少ない。東大寺領荘園に近いところでは、庄川右岸に徳万頼成遺跡（39）が発見され、左岸では秋元窪田島遺跡（36）や久泉遺跡（40）が集落として知られるにすぎない。また、扇状地上では、太田遺跡、高道遺跡、千代遺跡、宮村遺跡、小杉遺跡などが旧河道沿いのマッドと称される微高地上に存在している。これは、庄川扇状地東側の築田開発と時を同じくして扇央部への開発が進んでいたことを物語る。

中世の動乱　鎌倉時代に千保川東岸に広がる般若野一帯には、徳大寺家領般若野庄が成立した。庄域にあるこの時期の遺跡として、13世紀前半に比定できる東保高池遺跡（37）が知られる。

南北朝時代には、二宮円阿軍忠状に「和田城」という城名がみえる。和田城は、増山城に先立ち構築された亀山城であるという説が有力である。現在の亀山城は、戦国時代前期に修築された可能性が高いが、郭の配置や全体的な規模などから増山城より古い段階の構造をもつ。

室町時代に神保氏が婦負・射水郡の守護代となり、本城である放生津城の支城として亀山城を修築したとされる。永正３年（1506）、一向一揆を攻めるために進軍した越後守護代長尾能景が増山城に近い芹谷の合戦で討死していることから、軍事的緊張が高まっていたことが考えられ、亀山城の整備が行われ、現在の姿に近い形になったようである。さらに天文年間頃、神保長職が富山城の支城として増山城が構築されたと考えられる。こののち増山城は、長職を追撃した上杉謙信の手に落ち、永禄年間後期に長職と上杉が結んで一向宗徒を攻撃したときには、長職の本拠となっている。また、長職没後、一時的に反上杉方が居を構えるが、天正４年（1576）に謙信に攻められ落城し、天正９年（1581）に織田方に焼き払われている。天正11年（1983）以降、越中統一を果たした佐々成政によって修築された増山城は、この時もっとも城域が広く完成した姿をしていたものと考えられる。成政ののち、増山城は前田方の手に渡り、城の守将となった中川光重が退老もしくは没した慶長年間まで存続したと考えられる。

No	遺跡名	時代	種別	No	遺跡名	時代	種別
1	増山城跡（208001）	鎌倉・室町	山城	21	宮森新経塚（208035）	不明	経塚
2	増山池ノ平等窯跡（208021）	奈良・平安	窯	22	願照寺境内遺跡（20837）	鎌倉	墨？
3	増山団子地窯跡（208002）	奈良	窯	23	宮森新天池遺跡（208032）	縄文	散布地
4	増山遺跡（208027）	縄・奈・平・中・近	散布地・集落	24	上和田遺跡（208031）	縄文中・晩	散布地
5	増山亀田窯跡（208026）	奈良	窯	25	頼成Ｄ遺跡（208094）	旧石器	散布地
6	高沢島Ⅰ・Ⅱ遺跡（208024）	旧・縄・奈・平・近	散布地・集落	26	千光寺境内遺跡（208107）	中世・近世	寺院
7	高沢島Ⅲ遺跡（208025）	奈良・平安	散布地・集落	27	芹谷遺跡（208023）	旧・縄文・古代	散布地
8	増山妙荒寺坂窯跡（208028）	奈良	窯	28	池原遺跡（208020）	旧・縄文・古代	散布地・製鉄
9	増山西遺跡（208029）	不明	窯	29	狐塚（208022）	中世？	その他
10	東保石坂遺跡（208038）	縄文中・奈・鎌	散布地	30	須鉢末鉢遺跡（208016）	古代	製鉄
11	東保石坂南遺跡（208039）	古代	散布地	31	金クソ山遺跡（208010）	古代	製鉄
12	行者塚（208040）	不明	その他	32	徳万遺跡（208052）	縄文中・後・古・中	散布地
13	宮森廃寺（208041）	鎌倉・室町	寺院	33	長尾為景塚（208047）	不明	その他
14	宮森窯跡（208042）	奈良	窯	34	長尾義景塚（208048）	不明	その他
15	宮新遺跡（208030）	奈良	散布地	35	舘の土居跡（208092）	中世	城館
16	宮森新北島Ⅰ遺跡（208033）	縄文前・中・晩	集落	36	秋元窪田島遺跡（208072）	古代・中世	集落
17	光明寺塔（208034）	不明	経塚？	37	東保高池遺跡（208043）	平安・鎌倉	不明
18	宮森遺跡（208105）	縄文	散布地	38	堀内遺跡（208080）	古代・中世	不明
19	大谷島遺跡（208096）	縄文中・晩・奈・平	散布地	39	徳万頼成遺跡（208123）	縄・古墳・古代・中世・近世	集落
20	厳照寺遺跡（208036）	縄文	集落	40	久泉遺跡（208073）	縄・奈・平・室・近	集落

表１　増山城跡とその周辺遺跡一覧表

第4図　増山城跡とその周辺の遺跡　Scale＝1／50,000

※この地図は国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図を複製したものである.（承認番号）平14北複、第293号

第３章　調査の成果

第1節　調査方法と調査経過

調査計画　調査範囲が狭いことから、グリッドによる遺物取り上げは行わず、平成13年度試掘トレンチ（3T･4T）を基準として、北東－A区、北西－B区、南東－C区、南西－D区とした。調査計画は、試掘調査で得られたデータを基に、遺構面の数と包含層の厚さから包含層掘削土量を割り出し、その計算から得られた数値を「富山県埋蔵文化財発掘調査実施要綱･基準」に照らし、各調査工程に要する日数を算出したうえで調査体制及び計画を策定した。試掘調査結果から、遺構は検出されなかったが、遺構確認できる可能性のある面が１面存在した。しかし、実際には２面存在し、遺構も検出された。よって当初は５月末に発掘調査を完了する予定であったが、期間を延長せざるをえなかった。

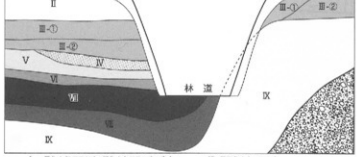
現地調査　現地調査は一般的な発掘の手順（表土・盛土除去→包含層掘削→遺構確認面の精査･遺構検出→遺構掘削→記録作業→写真撮影→平板測量→補足作業）で行った。包含層掘削にあたっては、調査区に十字にサブトレンチを設定するとともに平成13年度試掘トレンチで土層断面を確認しながら掘り下げた。また、小規模な土坑やピットについては、遺構検出したのちに５cm程度掘り下げた状態で記録し、測量後に遺構断ち割りを行い断面の記録作業をするという手順をとった。調査区をＡ～Ｄの区割りを単位として遺物を取り上げた。

調査日誌抄

５／７	事前準備	６／１	現地説明会
５／８	表土除去	６／４	下層包含層掘削開始
５／10	機材搬入	６／21	調査終了
５／13	人力掘削開始		

第2節　基本層序

現地は、七ツ尾山と高津保理山に挟まれた谷に位置しており、現在の林道を最低部として地山がＶ字に傾斜している。Ｘ層の青井谷泥岩層とⅨ層の地山シルト層が形成されたのち、Ⅷ層とⅨ層の層界が波状漸変であることから長時間をかけてⅧ層である黒色有機質層が堆積していることがわかる。Ｖ層とⅥ層には古代の遺物を含み、Ⅵ層上面で遺構を確認することができたので、これを下層遺構面とした。Ⅳ層は、地山の泥岩やシルトのブロックを多く含み、Ａ区東側やＣ区などではみられない。Ｄ区では、Ｃ区の地山上面をほぼレベルを同じくし、Ａ区からＢ区にかけても同様の現象がみられ、自然堆積とみるには不自然である。また、明確に検出できたものは少ないが、このⅣ層を掘り込んで遺構が造成されていることから、Ⅳ層を人為的に盛って平坦な地形を造りだしている可能性が高い。よってⅣ層上面を上層遺構面としてとらえることとした。また、Ⅲ層は下部で焼土・炭を多く含むことから、これを２層に分層した（Ⅲ－①･Ⅲ－②）。Ⅲ層上面でもⅣ層を踏襲するかたちで平坦な面が形成されているが、林道開削時の排土と考えられるⅡ層との間に旧表土層をもたないことから、遺構面としてとらえることはできない。

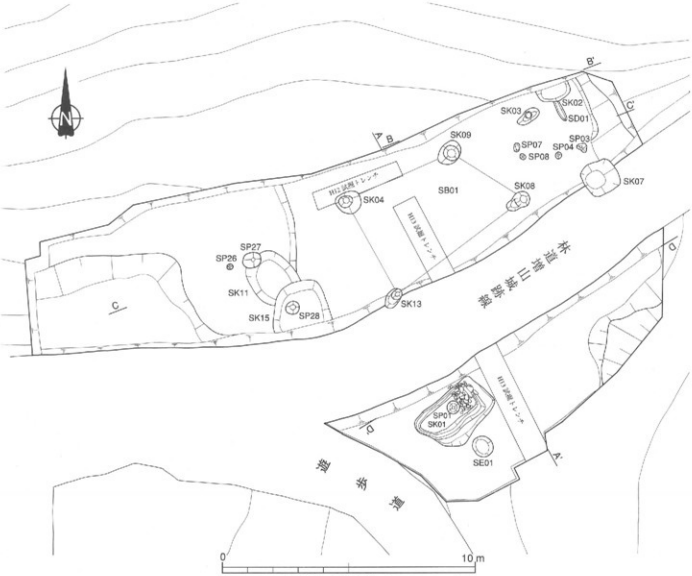


第５図　基本層序模式図

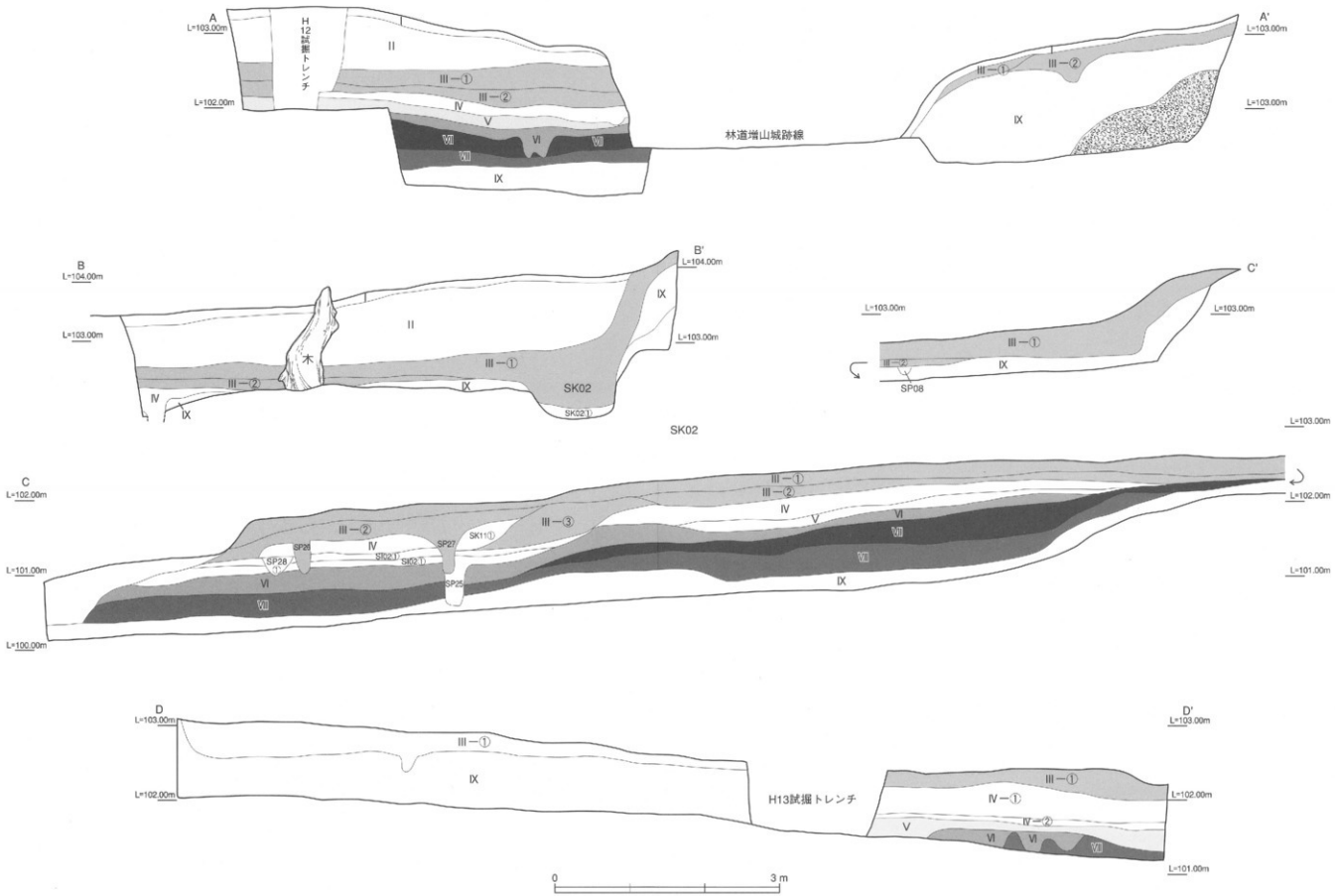
第3節　遺　構

（1）上層（中世）遺構面

上層遺構は、Ⅳ層上面もしくはⅢ層下層で確認することができた。A区では数基の遺構が検出されたが、Ⅳ層が存在しておらず、地山上面で検出するかたちとなった。どの層位から掘り込んでいるかとらえることができなかったが、地山上面が他の調査区におけるⅣ層上面と同じレベルに位置することから、Ⅳ層上面で検出された遺構と同一遺構面として扱うこととした。調査区東側では地山を大きく削り、切岸を造成している。この傾斜変換点付近に土坑（SK02・SK07）が2基存在し、その西側にピットが確認された。調査区北側の中央部は、Ⅳ層が広く堆積しており、その上面において遺構を確認できたが、なかにはⅢ層から掘り込まれた可能性が高い遺構もあった。A・B区中央には、堀り方が径1mに及ぶ大型の柱穴で構成される掘立柱建物が存在する。自然地形の利用か土地を改変したか定かではないが、B区西側で落ち込んでいる。上層遺構面は、盛土と考えられるⅣ層が広く覆っており、地山の泥岩ブロックが多く含まれ、特にSK11・SK15以西付近には人頭大のものが配置され、あたかも平坦面の端を強固なものにするという造成意図がうかがえる。また、上層遺構の年代観としては出土遺物から15世紀後半から16世紀後半に帰属するものと考えられる。



第6図　上層（中世）遺構全体図　Scale=1／150



第7図　調査区断面図　Scale＝1／50

①掘立柱建物

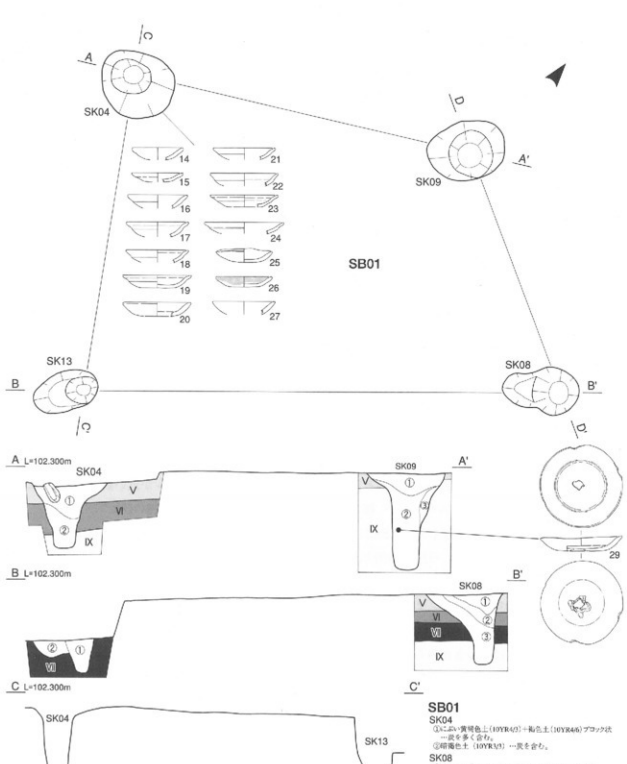
SB01 SK04・SK08・SK09・SK13で構成される。掘立柱建物として認定するにあたり、(1) 柱根痕跡の有無、(2)覆土がレンズ状堆積など自然埋没の様相を呈していないこと、(3)断割りによる遺構底面形態の確認に留意して抽出作業を行った。その結果、すべての土坑について柱根痕跡を確認することができなかった。埋土は地山シルト粒や炭が混ざるもので、SK09においては1m程度も同質の土が堆積する。SK04・SK08においては下部に同質の埋土が存在し、上部では掘り方が広い側から緩やかに傾斜して埋土が堆積しており、人為的に埋められたかのごとき様相を呈している。断面形状は、それぞれ底面がV字状になっておらず、20～30cm程度の径をもってやや垂直に立ち上がっており、柱穴断面のそれに似る。検出面における掘り方は、SK04－95cm、SK09－92cm、SK08－90cm、SK13－80cmである。弓庄城C地点6区において検出された掘立柱建物SB1006は、桁行2間・梁行2間の総柱建物であるが、柱穴は長軸110～130cm、短軸60～70cmの長円形で、柱根痕跡は直径25～30cmの規模を測り〔上市町教委：1985〕、SB01の柱穴規模に近い値である。このことから、SK04・08・09・13はもともと柱穴として機能していたものが、なんらかの事由により廃棄されることとなり、柱を抜き取られ埋められたものであると推定した。SK09底面から50cm程度のところに底部を打ち欠いた土師皿(29)が検出された。これは、SK09に柱根が存在していないことを示すとともに、建物廃棄（柱を抜き取られた）後に意図的に埋納されたものと考えられる。SK04からは多くの土師皿片(14－27)が検出されたが、それらは15世紀後半と16世紀中葉－後半の大きく二時期に分けられる。検出時に層位ごとに取り上げを行うことができなかったが、それらは建物機能時のものと、柱を抜き取ったあとに人為的に埋めた土に混ざりこんでいたものに含まれていたものに分けられる可能性がある。各柱穴の検出面からの深さは、SK04－84cm、SK08－93cm、SK09－126cm、SK13－45cmである。

掘立柱建物の柱穴を考える場合、その要素としては弱いが、4基とも底面レベルが近い数値を示す。このことから、SK13は他に比べ検出レベルが低いが、掘立柱建物を構成する柱穴とみなす根拠のひとつとした。

柱芯間の規模は、SK04－09：4.65m、SK13－08：6.28m、SK04－13：4.2m、SK09－08:3.35mを測り、やや距離にばらつきがみられる。弓庄城の例と比べても中世の掘立柱建物にしては規模が大きい。柱穴が存在する可能性を探って林道にテストピットを入れてみたが、なんら検出できなかった。亀山城側の調査区外には柱穴が存在するだけの空間がない。よって柱穴として成り立つ要素を持つものは4基だけであり、これらで掘立柱建物は構成されていたと判断した。例えば4基の柱穴によって上記の規模で建物が構成される場合、柱芯間規模が大きく距離にばらつきがみられ、なおかつ柱穴規模が大型である場合、掘立柱建物として認識できるだろうか。桁行・梁行が2間以上となれば、柱芯間距離のばらつきは建物としてみるには致命的であろうが、SB01のような方1間の建物であれば、奈良文化財研究所の松本修自氏によれば、「高層建物であれば方1間と解釈することは可能」とのことであり、柱穴規模から上屋がかなりしっかりした構造のものであると推測することができる。以上のような操作を行った結果、SB01は4本柱により構成される方1間の掘立柱建物であると判断するに至った。

②周溝遺構

SK01 D区で検出され、平成13年度試掘調査の3Tにその一部がかかっていた。掘り込み面は確認することができず、①層を掘り下げていくと、拳大の礫が多く出土したことから遺構として認識するに至った。実際に礫はもっと数が存在したはずである。ここにあえてSP01を図面に加えたのは、もともと別の遺構として扱っていたが、図面を整合させたときにちょうど中心部に位置し、さらにSP01検出時に上部にあった2個の礫は、SK01北半部に集合する礫群を構成するなかでも割合の高い地山泥岩であったことから、なんらかの関係性が



SB01

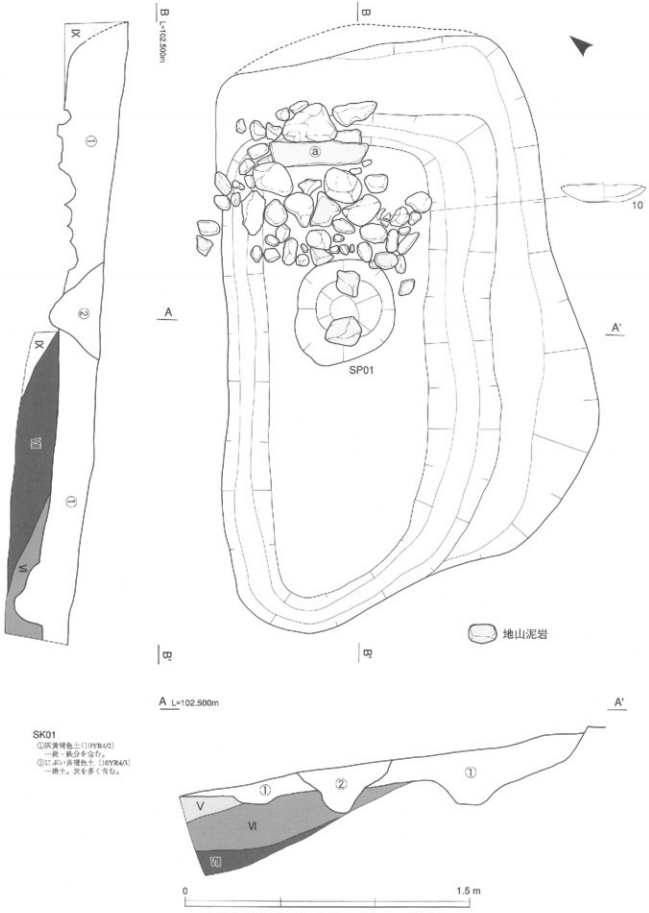
SK04
①にぶい黄橙色土（10YR4/3）＋褐色土（10YR4/6）ブロック状 …炭を多く含む。
②暗褐色土（10YR3/4） …炭を含む。

SK08
①暗褐色土（10YR3/4） ＋黄橙色土（10YR5/8） 粒状 ＋黒褐色土（10YR3/2） 粒状
②暗褐色土（10YR3/4） ＋灰褐色土（10YR5/2） 粒状少
③暗褐色土（10YR3/4） 多＋黄褐色土（10YR5/6） 粒状 ＋黒褐色土（10YR3/2） 粒状
④黒褐色土（10YR3/2） 粒状
⑤黒褐色土（10YR3/1） ＋暗褐色土（10YR3/4）

SK09
①暗褐色土（10YR3/3） ＋砂土シルト粒 …炭・砂土を多く含む。
②黒褐色土（10YR3/2） …炭を多く含む。
③灰黄色土（10YR5/2） ＋灰褐色土（10YR3/2）

SK13
①黒褐色土（10YR3/2） ＋灰褐色土（10YR4/4） 粒状 …黄褐色土（10YR5/6） 粒状一炭を含む。
②灰褐色土（10YR3/2） …炭を含む。

第8図　遺構図(1)　SB01(SK04･08･09･13)　Scale=1／50



第9図　遺構図(2)　SK01　Scale=1／20

あるものとして認識したことによる。SP01は焼土と炭を多く含むにぶい黄褐色土が入っていた。

全体の規模は、長軸3.1m、短軸1.94m、長軸方向は北東で、軸は東に56°振る。掘り肩から傾斜したところに幅の狭いテラスを造り、その下に20～35cm程度の溝が周囲を巡る。南西側ではU字、北東側ではコの字形を呈す。遺構の西側は、林道開削の影響を受けていると考えられ、本来は東側のようなテラスが存在した可能性がある。その周溝の内側、北東半分に地山泥岩・川原石・洪積礫で構成される集石がみられる。集石の中で図示したⓐは地山泥岩を成形し、枕状にしたものであり、地山である Ⅸ層を抉って配置されている。その他の礫は、加工を施していない。また、その集石中に16世紀後半のものとみられる土師器皿１点(10)がうつぶせの状態で検出された。遺構の性格は不明であるが、枕状の泥岩(ⓐ)や土師器皿などから墓の可能性がある。埋土中からは瀬戸美濃焼の青磁皿片が出土している。

③井 戸

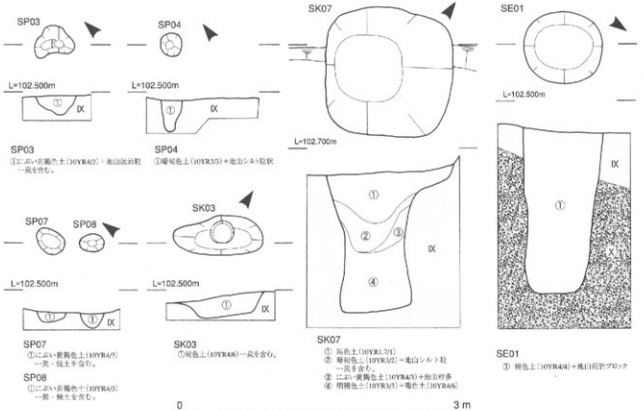
SE01　D区で検出され、Ⅸ層上面で確認された素掘りの井戸である。埋土は地山を多く含みⅣ層に近似することから、実際の掘り込み面はさらにレベルが高いものと考えられる。地山シルト層及び泥岩（Ⅸ・X層）を掘り込んで造られており、底部は地山泥岩(青井谷泥岩層)が縞状に堆積している層まで到達しており、湧水があるといわれる泥岩中の摂理がみられる部分まで掘り込まれていることから、井戸と判断した。遺物は検出されなかったことから、帰属年代を特定することは難しい。

④土 坑

SK07　A区と林道にまたがり検出されたもので、 地山シルト層であるⅨ層を大きく掘り込んでいる。Ⅸ層上面・Ⅲ層下で確認することができたが、埋土は上層と異なることから、Ⅲ層堆積以前に形成されたものであると考えられる。断面形態は素掘り井戸のそれに似るが、掘り込みがⅨ層内で完結している。湧水層まで掘削が到達していないので井戸の機能は考えられない。Ⅸ層はシルト層であり水の浸透率が低いことを考えると、貯水の機能が考えられる。④層からは、16世紀中葉～後半と考えられる完形の土師器皿（28）が検出された。

⑤ピット

SP03・SP04・SP07・SP08　柱穴と考えられるものはなく、すべてⅨ層上面において確認された。



第10図　遺構図(3)　SP03・04・07・08・SK03・07・SE01　Scale=1／40

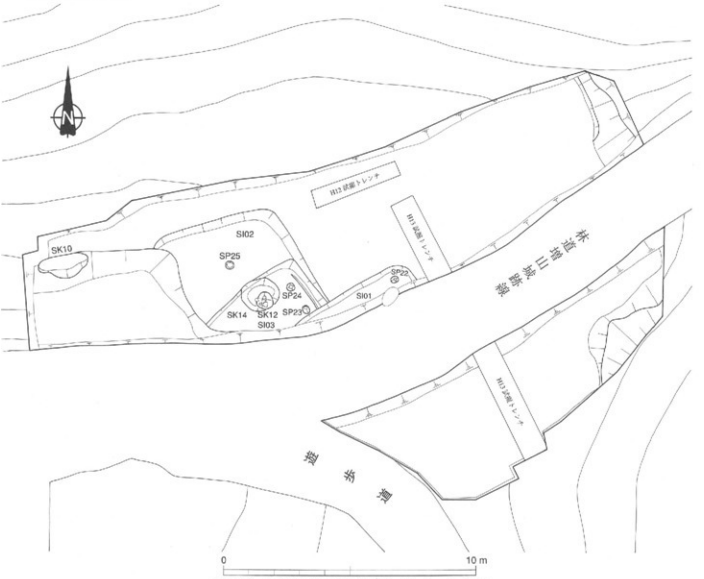
（2）下層（古代）遺構面

遺構は、Ⅴ層・Ⅵ層・Ⅶ層・Ⅷ層が堆積するB区を中心に検出された。上層遺構記録終了後、包含層を掘り下げたところ、Ⅳ層・Ⅴ層から主に須恵器・土師器などが出土した。とりわけⅤ層からの遺物出土が比較的多かったため、遺構が存在する可能性を考慮し、慎重に検出をねらったが遺構を捉えることはできなかった。

結局Ⅴ層除去後、遺構はⅥ層上面で検出するに至った。検出された遺構の分布と上層での遺物の分布する場所が重なる部分があったことから、Ⅴ層は一部遺物包含層化していたであろうが、遺構の掘り込み面・形成層は、Ⅴ層中に存在した可能性が高いということができる。

B区中央に竪穴建物が3棟検出されたが、大部分が林道によって破壊されていた。竪穴建物は3棟切り合って存在しており、いずれの竪穴建物もⅤ層除去後の埋土は薄く、また埋土がそれぞれ質的に似ていたことから、すべての切り合い関係を明確にすることはできなかった。数基のピットがそれらの竪穴建物に伴うようにして存在しており、柱穴となるものもある。

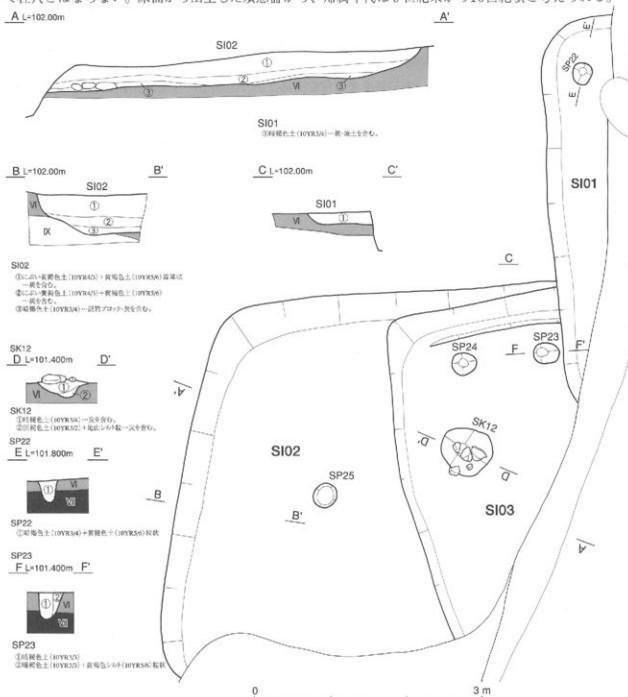
このほかの遺構として炭焼きをした可能性のある土坑が検出された。SK10は、B区西端に位置している。SK14は、竪穴建物の下層から検出された。ともに炭を多く含む土坑であり、埋土には炭を中心として構成される層が存在している。



第11図　下層（古代）遺構全体図　Scale=1／150

①竪穴建物

SI01　大部分が林道によって削平されており、検出された竪穴建物のなかでは、もっとも遺存状況の悪かった遺構である。Ⅵ層上面で検出することができたが、SI01上層のⅤ層中から須恵器や土師器などが集中して出土したことから、実際はⅤ層から掘り込まれ造成されていた可能性が高い。SI02・SI03を切って造成されており、竪穴建物のなかではもっとも新しいものである。平面形態は、唯一遺存していた建物の北辺と北東隅の形状から、方形を呈していると推測できる。建物規模は明確にはわからないが、北辺が少なくとも5mを測ることを考えると、建物が正方形ならばD区でその南辺が検出されるはずである。よって、南北長は5mに満たない規模であるということが推定可能である。北辺に沿ってわずかに周壁溝が検出された。SP22は位置などから柱穴の可能性も考えたが、断面形状がU字形を呈し、埋土からも柱根痕跡を確認することができなかったので柱穴とはならない。床面から出土した須恵器から、帰属年代は9世紀末から10世紀頃と考えられる。



第12図　遺構図(4)　SI01・02・03　Scale=1／50

SI02　平面的にはもっとも規模が把握できる竪穴建物である。北側はⅥ層から地山であるⅨ層を掘り込んで形成されている。建物の北辺・東辺が遺存しており、北東隅の形状から平面形態は、方形を呈するものと考えられる。上層遺構がいくつか切り合っていたことから遺存状況は決して良好であったとはいえないが、埋土は3層に分層でき、③層の暗褐色土は泥岩ブロックを含むかなりしまった土であることから、貼り床をもつ建物と考えられる。周壁溝は検出されなかった。

遺物としては、須恵器の杯(8)が検出されており、帰属年代は8世紀第3四半期のものと考えられる。出土遺物は、小破片が多かったものの、大部分が須恵器・土師器など古代に属する遺物であったことから、中世のものと考えられる土師器皿(9)は、上層の土坑に伴い混入したものと考えられる。

SI03　SI01に切られて存在しており、北辺・東辺の一部が検出された。建物の北東隅の角度がほぼ直角であることから、平面形態は方形と考えられる。東辺には良好に幅20㎝程度の周壁溝が遺存しており、それに並行してSP23・SP24が位置している。2基とも断面観察で柱痕痕跡が確認され、平面的な位置からも柱穴の可能性が高い。

北辺近くの床面には、SK12が存在していた。埋土は2層あり、いずれも炭を含んでいる。上部には礫がいくつか配されている。埋もしくはその周辺に焼土が全く検出されなかったことから、炉やカマドなど火を扱う施設である可能性は低い。

遺物としては、糸切り痕をもつ土師器椀の底部や須恵器がある。出土遺物から、帰属年代は9世紀末から10世紀頃のものと考えられる。

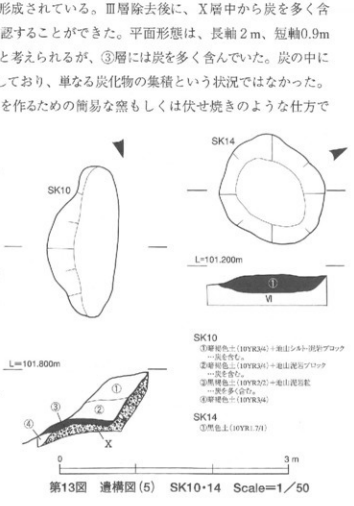
①炭焼き穴

SK10　遺構は、地山泥岩層であるX層を掘り込んで形成されている。Ⅲ層除去後に、X層中から炭を多く含む層を検出したことから、サブトレンチを設定し、確認することができた。平面形態は、長軸2m、短軸0.9mの楕円形を呈する。①・②層は廃棄後に堆積したものと考えられるが、③層には炭を多く含んでいた。炭の中には、樹枝の形態を保つ遺存状態の良いものが多く密集しており、単なる炭化物の集積という状況ではなかった。深く掘り込んで遺構が形成されていないことから、炭を作るための簡易な窯もしくは伏せ焼きのような仕方で炭を作っていた遺構である可能性が考えられる。炭は自然科学分析の試料とした(第5節・サンプル№3)。樹種同定の結果、コナラ属アカガシ亜属であることが判明、炭材に適する樹種であるので、炭焼き穴であることの傍証と考えられる。

埋土からは、須恵器盌の底部(30)が検出された。

SK14　遺構は、SI03床面を掘り下げたところ、検出された。ほとんど炭で構成される層が20～30㎝程度厚く堆積していた。炭は自然科学分析の試料とした(第5節・サンプルNo.2・4)。樹種同定の結果、SK10と同様にコナラ属アカガシ亜属であった。

遺物は土師器の底部(31)と須恵器の蓋(32)が検出された。



第13図　遺構図(5)　SK10・14　Scale=1／50

第4節　遺　物

ここでは今回の調査で出土した遺物についてその概要を述べる。詳細は遺物観察表(表2)を参照されたい。

出土遺物の帰属年代は、①弥生時代末から古墳時代初頭(3世紀末)、②奈良時代末から平安時代（8世紀後半－10世紀)、③鎌倉時代（12世紀)、④室町時代(15世紀後半)、⑤戦国時代末から近世（16世紀後半－17世紀初頭）と多岐にわたる。

遺物断面凡例

下層遺構面の竪穴建物からは、8世紀後半～8世紀第3四半期、9世紀～10世紀に位置付けられる須恵器杯・蓋が検出された。近接する池ノ平等窯跡や、栴檀野窯跡群との関連が示唆される。

上層遺構面からは中世土師器が多く出土した。土師器皿の多くは、増山城跡でこれまで出土しているものと年代的には同じ16世紀中葉から後半に位置するものである。14－19・23は、外面に横方向の強いナデを施し、つまみ上げるようにして口縁端部をおさめており、外面に稜がのこる。10・13・20・25－27・28は、口縁部を直線的に仕上げ、端部をつまみ上げている。すべて非ロクロ成形であり、口径は9～12cmを測る。特筆すべきはSK09より出土した29である。口径が14cmで他の土師皿と比べやや大型であり、内面より穿孔してある。底部穿孔することによって非日常の容器としたものか。法量は、白鳥城跡などで出土している中型品の土師器皿に近似する〔富山市教委：1984〕。

また、15世紀後半の土師皿がSK04から出土している。21・22・24は、外面に横方向の強いナデを施し、口縁まで直線的に立ち上がる。

弥生土器　36は体部が倒卵形を呈す甕の底部である。弥生時代後期後半から古墳時代初頭のものと考えられる。外面には上部からの刷毛目、内面は篦削りを施す。35は高杯の受部と考えられ、外面に赤彩を施す。

土師器　包含層出土の土師器は、古代に帰属するものが多く、杯・甕などで構成される。杯は、口縁端部で外反するようにつまみ上げ（37･38)、底部は平底無高台で回転糸切り痕がある（43－46)。47は、底部が高台状を呈し、外面にわずかな段がついている。12世紀代のものと考えられる。

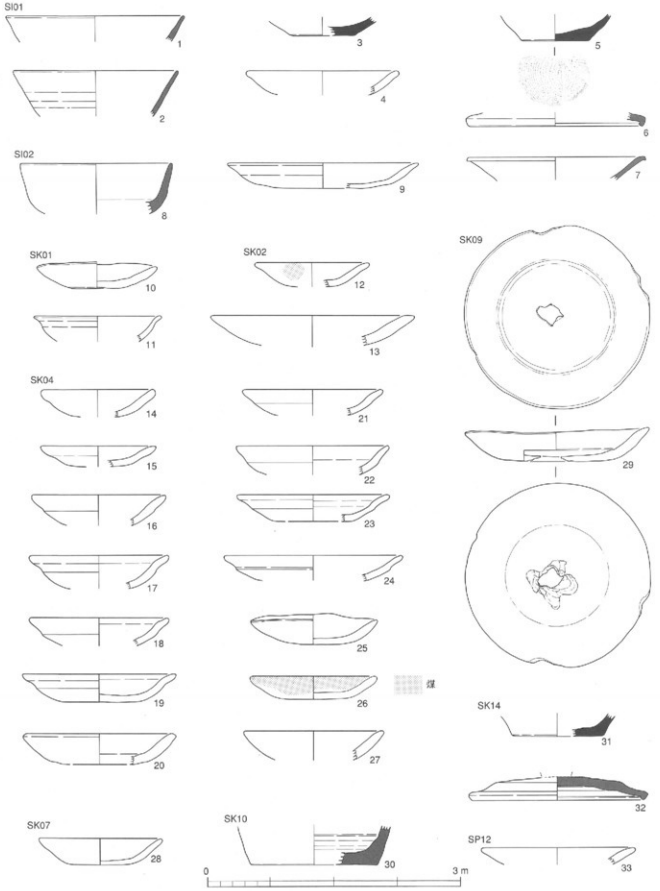
40は小型甕の下半部で、胴部外面に篦削りを施す。48は甕である。口縁部が頸部で外反し、そのまま直立するタイプである。外面は、頸部下にはカキメ、胴部全体に平行叩き目を施し、内面下半には同心円文の叩き目を行う。昭和52年に発見された高沢島Ⅱ遺跡の出土遺物と同時期のものと考えられ、8世紀代に位置する〔砺波市教委：1978〕。

須恵器　器種は、杯・杯蓋・壺(双耳瓶)で構成される。杯（49－51）は、口径が12.0cmを測り、口縁部が直線的に外傾する。底部(52・53)には低い高台がつく。双耳瓶は耳部のみ検出され外面には自然釉がかかる。

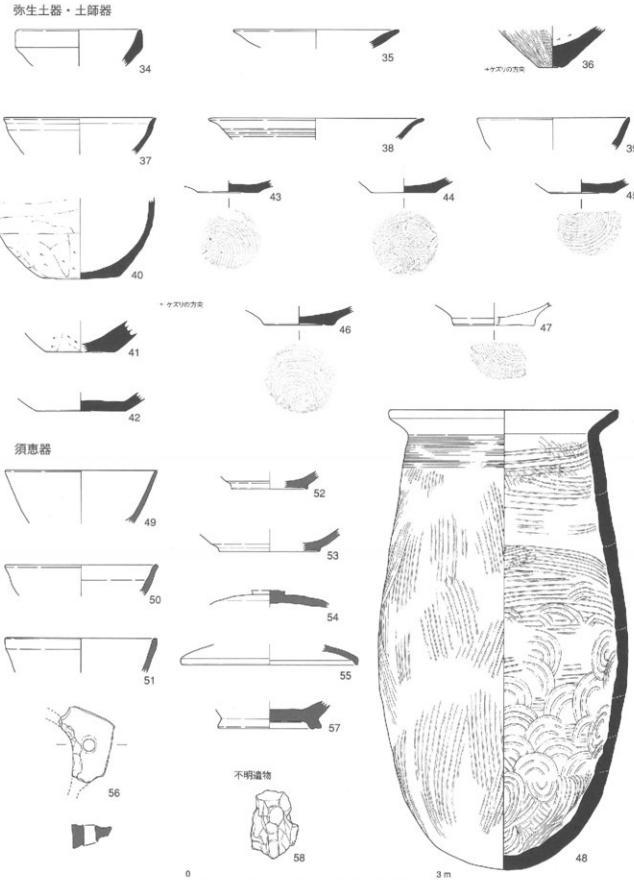
中世土師器　口縁部が内側につまみ上げるもの（59・61・63)、端部を平坦に仕上げ面取りを施したようなもの（60・64)、体部から直線的に立ち上がるもの（65・66）がある。いずれも16世紀中葉から後半に位置付けられるものと考えられる。

瀬戸美濃焼　天目茶碗(68)が1点のみ出土している。口縁端部がくの字に立ち上がる。内外面には鉄釉がかかり、外面底部には錆釉を施す。

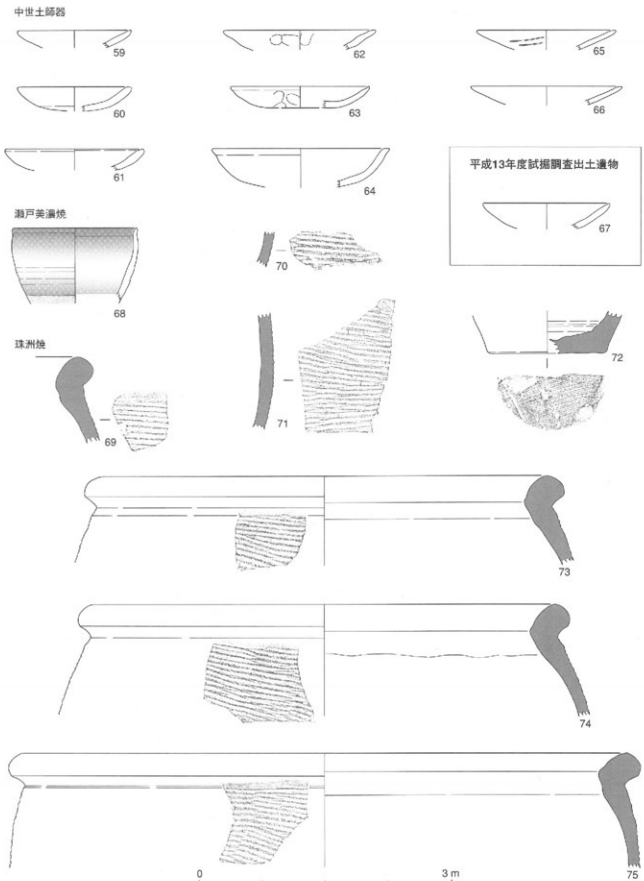
珠洲焼　器種は、甕・壺で構成される。甕は、肩の張り出しが弱いタイプで、口縁部は挽き出しが認められず短頸化している。胴部外面には粗いタタキ目が施されている。このことから吉岡編年Ⅳ－Ⅴ期に相当するものと考えられ、14－15世紀という年代を与えうる。



第14図　遺物実測図(1)　遺構出土遺物(SI01・02・03・SK01・02・04・07・09・10・14・SP12)　Scale＝1／3



第15図　遺物実測図(2)　包含層出土遺物(弥生土器・土師器・須恵器・不明遺物)　Scale=1／3



第16図　遺物実測図(3) 包含層・平成13年度試掘調査出土遺物(中世土師器・瀬戸美濃焼・珠洲焼)　Scale=1／3

表2　遺物観察表

図版	No	出土地点	器種	口径	底径	器高	口径残存率(%)	底径残存率(%)	色調	焼成	備考
14	1	SI01	須恵器杯	14.0			5.0		10Y6/1	並	
〃	2	〃	〃	13.0			25.0		10YR6/2	良好	
〃	3	〃	土師器椀		5.0			25.0	7.5YR6/6	並	
〃	4	〃	土師器皿	12.0			10.0		10YR8/4	不良	
〃	5	SI03	土師器椀		5.5			75.0	7.5YR6/6	不良	底部糸切り痕あり。
〃	6	〃	須恵器蓋	13.6			5.0		5Y5/1	良好	
〃	7	〃	須恵器杯	14.0			5.0		2.5Y6/2	良好	磁器の模倣須恵器。
〃	8	SI02	須恵器杯	12.0			5.0		2.5Y6/2	良好	
〃	9	〃	土師器皿	15.0			12.5		10YR8/3	良好	非ロクロ成形・15世紀後半。
〃	10	SK01	土師器皿	9.4	3.4	2.1	85.0	100.0	10YR7/4	良好	非ロクロ成形・16世紀後半。
〃	11	〃	瀬戸美濃皿	10.0			5.0		10YR7/2	良好	青磁。
〃	12	SK02	土師器皿	9.0			25.0		10YR6/4	良好	外面煤付着。非ロクロ成形・16世紀中葉。
〃	13	〃	〃	16.0			10.0		10YR6/4	良好	非ロクロ成形・16世紀中葉。
〃	14	SK04	土師器皿	9.0			25.0		7.5YR7/6	不良	非ロクロ成形。
〃	15	〃	〃	9.0			15.0		10YR6/2	不良	非ロクロ成形。体部に強い横ナデ。
〃	16	〃	〃	10.6			15.0		10YR4/2	不良	非ロクロ成形。体部に強い横ナデ。
〃	17	〃	〃	11.0			15.0		10YR7/3	並	非ロクロ成形・16世紀後半。
〃	18	〃	〃	11.0			25.0		10YR5/2	不良	非ロクロ成形・16世紀後半。
〃	19	〃	〃	12.0	6.0	2.2	35.0	50.0	7.5YR7/3	不良	非ロクロ成形・16世紀中葉。
〃	20	〃	〃	12.0	5.0	2.4	12.5	12.5	10YR8/4	良好	非ロクロ成形。
〃	21	〃	〃	11.0			12.5		10YR6/3	不良	非ロクロ成形・15世紀後半。
〃	22	〃	〃	12.0			12.5		10YR6/2	並	非ロクロ成形・15世紀後半。
〃	23	〃	〃	12.0		2.1	10.0		10YR5/3	不良	非ロクロ成形。
〃	24	〃	〃	14.0			10.0		10YR6/3	並	非ロクロ成形・15世紀後半。
〃	25	〃	〃	9.9	2.5	2.5	75.0	75.0	10YR4/1	良好	非ロクロ成形。
〃	26	〃	〃	10.0	5.4	1.8	25.0	25.0	10YR4/2	並	内外面煤付着。非ロクロ成形。
〃	27	〃	〃	11.0			15.0		10YR5/2	並	非ロクロ成形。
〃	28	SK07	土師器皿	9.7	4.0	2.1	100.0	100.0	7.5YR8/4	並	完形品。非ロクロ成形・16世紀中葉～後半。
〃	29	SK09	土師器皿	14.5	8.0	2.7	100.0	100.0	10YR7/3	良好	底部穿孔。内面から打ち欠いている。
〃	30	SK10	須恵器壺		10.0			15.0	N4/1	良好	双耳瓶の底部か？
〃	31	SK14	土師器椀		7.0			20.0	10YR7/4	並	
〃	32	〃	須恵器蓋	13.2			25.0		5Y6/1	並	内面、硯に転用。
〃	33	SP12	土師器皿	12.0			5.0		10YR8/2	不良	非ロクロ成形。
15	34	表採	土師器壺	10.0			5.0		10YR7/4	不良	
〃	35	B区Ⅲ層	土師器高杯	13.0			20.0		7.5YR7/4	不良	外面赤彩。
〃	36	B区Ⅵ-Ⅶ層	弥生土器甕		1.8			100.0	10YR6/4	並	弥生時代末。
〃	37	B区Ⅴ-Ⅵ層	土師器椀	12.0			15.0		7.5YR6/6	不良	
〃	38	A区Ⅴ層	〃	17.0			5.0		5YR6/6	不良	
〃	39	B区Ⅵ層	〃	12.0			12.5		10YR3/3	良好	
〃	40	A区Ⅳ層	土師器甕		5.9			100.0	10YR6/4	並	外面ヘラケズリ。9世紀前半以降。
〃	41	B区Ⅳ層	〃		5.4		15.0		10YR6/3	良好	外面ヘラケズリ。
〃	42	B区Ⅴ-Ⅵ層	土師器椀		7.0			20.0	10YR6/3	良好	
〃	43	B区Ⅴ-Ⅵ層	〃		5.2			85.0	5YR6/6	不良	底部糸切り痕あり。
〃	44	B区Ⅵ層	〃		5.0			100.0	10YR7/4	不良	底部糸切り痕あり。
〃	45	B区Ⅴ-Ⅵ層	〃		5.0			25.0	7.5Y6/4	並	底部糸切り痕あり。
〃	46	B区Ⅵ層	〃		5.4			100.0	5YR6/6	並	底部糸切り痕あり。
〃	47	B区Ⅴ層	〃		6.4			20.0	5YR6/6	並	底部糸切り痕あり。12世紀。
〃	48	B区Ⅳ-Ⅵ層	土師器甕	18.0	―	36.3	20.0	―	7.5YR7/4	並	8世紀中葉。
〃	49	B区Ⅴ-Ⅵ層	須恵器杯	12.0			5.0		2.5Y7/2	不良	
〃	50	B区Ⅳ層	〃	12.0			5.0		2.5Y7/2	並	
〃	51	B区Ⅲ層	〃	12.0			5.0		10YR6/2	並	
〃	52	B区Ⅳ層	〃		6.0			15.0	10Y7/1	良好	底部糸切り痕あり。10世紀。
〃	53	B区Ⅳ層	〃		8.0			5.0	5Y7/1	並	
〃	54	B区Ⅳ層	須恵器蓋						7.5Y5/1	並	8世紀後半。
〃	55	B区Ⅴ-Ⅵ層	〃	14.0			5.0		5Y6/1	良好	8世紀後半。
〃	56	C区Ⅲ層	須恵器双耳瓶						10YR5/2	良好	自然釉かかる。
〃	57	B区Ⅲ層	須恵器壺		8.2			50.0	N4/1	不良	底部、硯に転用。
〃	58	C区Ⅲ層	不明遺物						2.5Y4/1	不良	鞴羽口もしくは鋳型か？
16	59	B区Ⅲ層	土師器皿	9.0			5.0		10YR4/2	並	
〃	60	B区Ⅲ-①層	〃	9.0			15.0		10YR7/4	不良	非ロクロ成形・16世紀後半。
〃	61	A区Ⅴ層	〃	11.0			5.0		7.5YR7/4	並	非ロクロ成形。
〃	62	A区Ⅳ層	〃	12.0			10.0		7.5YR7/6	不良	非ロクロ成形。
〃	63	A区Ⅳ層	〃	11.0			10.0		10YR7/3	並	非ロクロ成形。
〃	64	B区Ⅳ層	〃	14.0			15.0		10YR7/4	並	非ロクロ成形・16世紀後半。
〃	65	A区Ⅲ-①層	〃	11.0			10.0		7.5YR6/4	不良	非ロクロ成形。
〃	66	A区Ⅲ-①層	〃	12.0			5.0		10YR6/2	不良	非ロクロ成形。
〃	67	H13試掘	〃	10.0			20.0		10YR3/4	良好	非ロクロ成形。
〃	68	D区Ⅲ-①層	瀬戸美濃 天目茶碗	10.0			12.5		2.5YR1.7/1	良好	内外面鉄釉・外面底部錆釉。
〃	69	C区Ⅲ層	珠洲甕						5.1Y5/1	良好	吉岡編年Ⅴ期。
〃	70	A区Ⅲ層	〃						10YR5/1	良好	
〃	71	C区Ⅲ層	〃						N3/1	良好	
〃	72	C区Ⅲ層	珠洲壺		9.0			50.0	N4/1	良好	
〃	73	C区Ⅲ層	珠洲甕	34.0			5.0		5Y5/1	良好	吉岡編年Ⅳ-Ⅴ期。
〃	74	A区Ⅲ層	〃	36.6			10.0		5Y5/1	良好	吉岡編年Ⅳ-Ⅴ期。
〃	75	C区Ⅲ層	〃	48.0			5.0		10YR5/1	良好	吉岡編年Ⅳ-Ⅴ期。

第5節 自然科学分析

株式会社中部日本鉱業研究所
考古事業部　埋蔵文化財調査室

1．測定試料

測定試料は増山城跡出土の炭化材（サンプルNo１～４）である。

サンプルNo１：Ⅲ-②層より採取。小枝状及び板材状の２種類から成る。
サンプルNo２：SK14より採取。伏せ焼きの炭窯と考えられる土坑。遺構内より古代のものと考えられる須恵器片が出土している。
サンプルNo３：SK10より採取。伏せ焼きの炭窯と考えられる土坑。遺構内より古代のものと考えられる須恵器片が出土している。
サンプルNo４：SK14より採取した炭化材。小枝状及びミカン割材の２種類から成る。

サンプルNo1、No2については放射性炭素年代測定を実施（No１は板状の試料を分析）。
サンプルNo3、No4については樹種同定分析を実施した（No４は２種類ともに分析）。

2．測定方法

①放射性炭素年代測定
加速器質量分析法（AMS法）による測定を実施。放射性炭素の半減期は5568年を使用した。
分析には株式会社加速器分析研究所の協力を受け、測定年代の暦年代への変換についてはワシントン大学の暦年代プログラム「Radiocarbon Calibration Program REV4.12」を用いて当社にて実施した。
②樹種同定
試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作成し、実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察しその特徴から種類を同定した。分析にはパリノサーヴェイ株式会社の協力を受けた。

3．測定・分析結果

(1)放射性炭素年代測定結果
サンプルNo１（試料ID:IA542）:
・測定年代：290±30BP（補正年代3310±30BP）
・「Radiocarbon Calibration Program REV 4.12」による暦年代：
切片法による年代交点　　AD 1531年・1545年・1635年

確立分配法による年代範囲　AD 1522年～1585年（確立86.6％）

切片法による年代交点からAD1531年・1545年・1635年、また確立分配法による年代交点から**AD1522年～1585年**（この間に含まれる可能性86.6％）という測定値が得られた。切片法によって得られたAD1531・1545年という測定値は確立分配法による年代範囲内に納まっていることから、暦年代として信頼性の高いと考えられる。

サンプルNo２（試料ID:IA543）:

・測定年代：930±30BP（補正年代920±30BP）

・「Radiocarbon Calibration Program REV 4.12」による暦年代

切片法による年代交点　　AD1061年・1086年・1123年・1138年・1156年

確立分配法による年代範囲　AD1031年～1185年（確立100％）

＊　添付　校正グラフ参照

切片法による年代交点からAD1061年・1086年・1123年・1138年・1156年また確立分配法による年代交点から**AD1031年～1185年**（この間に含まれる可能性100％）という測定値が得られた。切片法によって得られた全ての数値が確立分配法による年代範囲内に納まっていることから、暦年代として信頼性が高いと考えられる。

(2) 樹種同定分析結果

サンプルNo３、No４ともに**コナラ属アカガシ亜属**と分析される。

アカガシはブナ科に属する広葉樹で、重硬かつ強度の高い材質である。これらの試料は木炭として製炭された可能性があり、その場合はいわゆる硬炭に分類される。

尚、サンプルNo１についても樹種同定を実施した結果、板状の炭化材片がケヤキ。細い枝状の炭化材がヤブツバキであった。ケヤキは落葉広葉樹で重硬で強度や耐水性に優れた材質を有し、建築部材や器具材など様々な用途に利用される有用材である。一方ヤブツバキも重硬で強度が高く、こちらも建築部材としてよく利用される樹種である。これらの試料はいずれも炭化しており、何らかの形で火を受けて燃やされ、炭化したものであると考えられる。

＜参考資料１＞

①放射性炭素年代測定結果から暦年代の変換について

分析機関において測定された放射性炭素年代（BP）を暦年代（AD）へ校正・変換する場合、大学等の研究機関が作成したプログラムを使用して暦年代へ変換するのが一般的である。

当社ではワシントン大学「Radiocarbon Calibration Program REV 4.12」を使用して暦年代変換を行っており、このプログラムはRadiocarbon 国際学会によりまとめられた校正曲線 INTCAL98 calibration cure （Stuiver et al 1998）を用いている。

ワシントン大学のプログラムを使用して暦年代へ変換する場合には、切片法と確立分配法の二つの計算方法がある。切片法（Method A:Intercept）は測定した炭素年代が校正曲線と交差した点の年代を示す方法で、校正曲線の凸凹により一つの炭素年代に対して複数の暦年代が対応する場合がある。

確立分配法（Method B:Probability Distribution）はこれらの複数の校正年代についてその信頼性を確立で示す方法である。

年代測定値を暦年代へ変換する場合、これらの計算方法を併用する形で用いている。つまり切片法で一つだけ校正年代が得られたならば、そのまま信頼できる値として捉え、もし複数の年代が得られる場合は確立分配法に基いて最も信頼度の高い数値を利用するのが望ましいといえる。

②各樹種の解剖学的特徴について。

アカガシ：コナラ属アカガシ亜属。ブナ科。

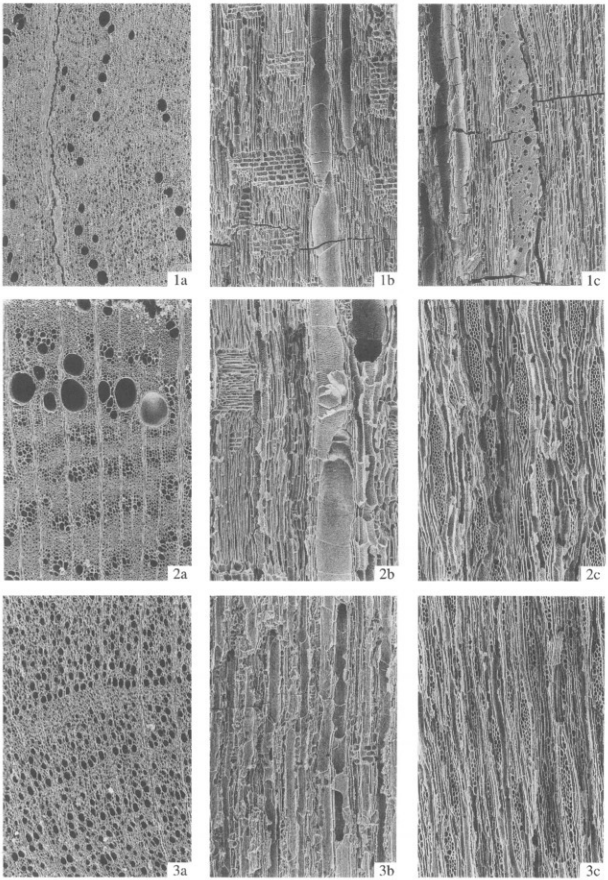
放射孔材で管壁厚は中庸～厚く、横断面は楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のもと複合放射線組織とがある。

ケヤキ：ニレ科ケヤキ属

環孔材で孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様を成す。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、１～10細胞幅、１～60細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

ヤブツバキ：ツバキ科ツバキ属

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独および２～３個が複合して散在し、年輪界に向かって形を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～段階状に配列する。放射組織は異性Ⅱ～Ⅰ型、１～２細胞幅、１～20細胞高で、時に上下に連結する。



1．コナラ属カガシ亜属（試料番号３）
2．ケヤキ（試料番号１）
3．ヤブツバキ（試料番号１）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200μm:a
200μm:b,c

第4章　考　察

本章では、今回の調査で得られた調査成果から上層遺構面を中心に若干の考古学的考察を行ってみたい。

上層は、遺構から出土した遺物の年代から15世紀後半から16世紀後半に帰属するものと考えられるが、その中心は16世紀後半に置くことができるようである。すべての遺構が同時期に存在・機能していたと捉えるには根拠が乏しいが、掘立柱建物を構成する柱穴SK04から出土した土師器が15世紀後半に帰属するほかはすべて16世紀中葉から後半に限定される。また、自然科学分析によると上層遺構確認面であるⅣ層直上の皿-②層から出土した炭化材の暦年代がAD1522年～1585年（この間に含まれる可能性86.6%）という数値を示しており、若干の年代幅を考慮しても遺物の年代観とは矛盾しない。よって総体として16世紀後半を中心に推論をすすめたい。遺構は、掘立柱建物などを中心に平坦面に配置されている。調査区東側では地山を削り出し、明確な段差を設けており、西側では谷に向けてやや小規模であるが切岸を形成し、平坦面を造りだしている。このことから、明らかに郭（曲輪）として意識的に造成されているものと考えられ、固有の機能を有していたものと推察される。

（A）掘立柱建物の構造

平坦面の面積は、約280㎡を測る。面積としては小規模ながら掘立柱建物など遺構密度は高い。平坦面は平面形態がややいびつな方形を呈している。東側は本来存在した可能性が高いⅤ層以下の層を削り、Ⅲ層堆積前に地形を改変している。東側の段差は、方形の空間を作り出すことを意図しているものと思われる。下層に竪穴建物が存在することから、古代においても地形的に平坦であったことがうかがえ、郭はそのような地形を利用して造られたと考えられる。また、北側については調査区の範囲内に含まれないため、現地形から復元したものである。この調査区外に遺構が存在している可能性は充分に考えられる。

第3章で述べたように掘立柱建物SB01は、方1間に柱が配置され、柱芯間距離にばらつきがみられる。検出面での直径が1m前後、深さは少なくとも130㎝を測るものも存在するなど柱穴規模が大きいことから、上屋が長大な構造であることが推認される。換言すれば、寺社建築等の構造物というよりむしろ高層の建造物であったとみるほうが妥当であろう。また、柱芯間距離のばらつきは、この建築物が高さに重きを置いて建造された所産であるとみることができる。増山城跡という中世山城の範囲内にあることを考慮すると、この時期における高層建物とすれば、物見櫓のような機能を有してしたことが考えられる。築造年代については、詳細にはわからない。しかし、SK09で検出された土師器皿（29）が柱を抜き取った直後に地鎮の意味を込めて埋納されたものである可能性が高く、建物が機能した期間の上限は少なくとも16世紀後半に置くことができる。柱掘え換えの痕跡はないことから建物は1回建てられ廃絶するまで建て替えは行われなかった可能性が高い。このことから、逆算するとSB01が廃絶した16世紀後半から掘立柱建物の維持可能期間といわれる30年を差し引いた時期を築造年代とみることができ、少なくとも16世紀前半から中葉前後に建てられ、16世紀後半に廃絶したということができる。増山城は、天文中期から永禄年間にかけ神保長職が富山城の支城として増山城を構築したとされる。また、天正9年（1581）に織山方に焼き討ちにあっており、佐々方の手に下ったあと前田方の領有となった。これらの事象がSB01の築造・廃絶時期となんらかの関係があるのではないだろうか。

郭の機能を考える場合、掘立柱建物の存在理由を避けることはできない。郭が存在する場所は、法花坊谷のなかにあり、馬乗馬場側への峠に立地している。法花坊谷側・馬乗馬場側にらみをきかす場所と見ることができ、高層建築物であれば双方への見通しが可能である。廃絶した理由は明確でないが、再び建物が築造されていないことから、郭の機能が変化したかその役割自体が無くなってしまったものと考えられる。

(B)城域における郭の位置

この場所に郭が作られた理由は、その位置に関係があると考えられる。以前から亀山城と増山城跡中心部を結ぶ場所として認識されていたが、その他の場所への連絡路としての在り方も視野に入れるべきである。

この郭から連絡することが可能なところを挙げると、①亀山城西側（現在の登山口）、②亀山城東側（最下の帯郭）、③法花坊谷、④馬乗馬場、⑤小判清水、⑥増山城中心部（池ノ平等屋敷・七ツ尾山屋敷など）の大きく6箇所である。

亀山城へは城下の町方面からは法花坊背側からの進入が可能であるが、増山城中心部からは①・②を通ると亀山城中心部へ直接行くことが可能である。③―④を結ぶ線は、城下の町から緩負郡・射水郡へ抜けるルートであり、古代から続く交通路であったと考えられ、その峠に位置する。④は法花坊谷に沿って城下の町へ直接でることができ、また裏亀山を通って亀山城西麓の和田川岸にあったとされる舶着き場伝承地に行くことも可能であったと考えられる。

『越登賀三州志』にある「本丸に清水あり。其の他古井戸多し。水便よし」の一文にみられるように、増山城は池ノ平等屋敷にある伝神保夫人身投げの井戸や又兵衛清水・馬洗い池など水を得られる場所が豊富な山城として著名であるが、これに対して亀山城は取水の場が今のところ見つかっていない。このことから⑤の小判清水は亀山城にとって貴重な給水場であったことがうかがえる。⑥は現在も遊歩道として活用されている道で、池ノ平等屋敷や七ツ尾山屋敷などを経て増山城中心部へ進入できる道である。

以上のことから、この場所は交通の要衝であり、なおかつ増山城域内において重要な連絡機能を持っていたことが推察される。

第17図　調査地推定復元図　Scale=1／200

第5章　まとめ

今回の調査では、調査面積250㎡という小規模ながら多くの成果が得られた。これは、今までの増山城跡総合調査では実現できなかった平面的な調査が実施できたことによるものであると考えられる。

調査地は、増山城と亀山城を連絡する場所としてこれまでも注意されてきたが、今回新たに明確な遺構を伴う郭としての機能をもつ場所であったということが判明した。なかでも物見櫓と考えられる掘立柱建物は、これまでの**増山城跡調査において初めて検出された建物跡**であり、郭の持つ機能の一端を明らかにした。

また、これまでの増山城跡総合調査において出土していない遺物も検出された意義は大きい。中世土師器を中心として16世紀中葉から後半に属する遺物がこれまでも多数検出されてきたが、**15世紀後半のものと考えられる土師皿が初めて検出されたこと**は、今後の増山城跡調査の可能性が広がるものとして注目すべきである。県指定となっている増山城跡中心部（一ノ丸・二ノ丸・三ノ丸・安室屋敷など）の調査が行われていないことから明言できないが、『越中砺波射水両御郡古城等覚書』にみえる「亀山之城より増シタルヨシニテ増山と名付ル」という一文や、郭の配置が「増山城のように水平的に広がらず、むしろ垂直的かつ同心円状に郭を配して」おり、「亀山城のほうがより古い山城の形態をとどめている」という視点〔高岡：1991〕から、15世紀後半の遺物は、位置的にも近い亀山城に関連する可能性が示唆される。亀山城の調査は今まで行われていないため、平成15年度に実施予定の増山城跡総合調査（第7次）に今回の調査成果が反映されることを願うばかりである。

また、**中世の郭の下層に古代を中心とする遺構・遺物が検出されたこと**も新たな知見である。古くは弥生時代から奈良・平安時代を通じて年代幅のある遺物が存在することは、砺波郡から射水・婦負両郡への交通路に位置し、長期にわたり人間活動に深く関わりのある地であったことは想像に難くない。

B区Ⅵ・Ⅶ層からは、**砺波市内の発掘調査において初めて弥生土器が検出された**。小矢部川流域には弥生時代遺跡が分布し、古墳時代に入って二上山丘陵から蟹谷丘陵にかけて多くの古墳が造営されている。射水丘陵には串田新遺跡をはじめ墳丘墓をもつ集落が存在することが知られる。また、呉羽丘陵西麓の山田川流域には四隅突出型墳丘墓を中心として土塚古墳・勅使塚古墳などの古墳が分布し、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて隆盛をみる。該期の遺跡がない空白の地帯となっている庄川右岸一帯は、小矢部川流域や射水丘陵の状況を考えると、弥生時代や古墳時代の遺跡がいくらか存在する可能性があると考えられる。山城の調査において弥生土器が検出されるなど高地性集落との関連が指摘されており〔塩田：2002〕、今回の弥生土器の出土も、付近に砺波・射水平野を見渡す高津保理山（亀山城）があることからその可能性は捨てきれない。

増山城は、天正11年頃に佐々成政が越中国内統一を果たし、富山城を本拠とする西の支城として重要視された。成政は、前田利家と加越国境付近での交戦前後から増山城の修築を行っていたものとみられ、軍事的緊張が最も高まったこの頃がもっとも整備・拡充がなされたものと考えられている。しかし、調査地は、16世紀前半から中葉頃に大型の掘立柱建物を建造し郭として機能を有しており、築造時期は少なくとも成政の時代より遡る。**【増山城の大規模修築＝佐々成政の時代】**というこれまでのイメージに一石を投じるものとなろう。

さらに今回のように城郭の中心部から外れた位置にも郭がしっかりと存在することは、長尾景虎をして「増山之事、元来嶮難之地」と言わしめた増山城跡の堅牢なる構造の一端を如実に示すものとして評価したい。そして以上のように大きな成果が得られたことは、これまであまり調査例のない**谷部や郭配置の最端部にも目を向けなければならないという重大な契機**になるものと確信している。

最後に今回検出された郭を「**法花坊峠郭**」と仮称することとし、結語としたい。

【参考文献】

安念幹倫　1991「七　城跡群の遺物」『富山県指定史跡　増山城跡調査報告書』　砺波市教育委員会・砺波郷土資料館

池野正男　1987「射水丘陵における８世紀後半の須恵器窯跡」『大境』第11号　富山考古学会

井口村教育委員会　2002『井口Ａ遺跡発掘調査報告』

内田亜紀子　1998「越中における古代土師器の編年予察」『富山考古学研究』　創刊号　財団法人富山県文化振興財団

宇野隆夫　1989「第５章　考察」『越中上末窯』富山大学人文学部考古学研究室

上市町教育委員会　1985『富山県上市町弓庄城跡第５次緊急発掘調査概要』

経済企画庁　1970『土地分類基本調査（石動）』

古代の土器研究会　2001『古代の土器研究―須恵器の製作技法とその転換―』

(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2002『清水島Ⅱ遺跡・中名Ⅱ遺跡・持田Ⅰ遺跡発掘調査報告』

(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2002『石名田木舟遺跡発掘調査報告』

佐伯安一　1979『郷土史』『角川日本地名大辞典　16　富山県』　角川書店

酒井重洋　1998「中世土師器の分類について」『富山考古学研究』創刊号　財団法人富山県文化振興財団

榊原滋高　2001『柱穴の調査方法を考える』『掘立と整穴』

塩田明弘　2002「越中（富山県）の様相」『中世北陸の城館と寺院』北陸中世考古学研究会

栴檀山村史刊行会　1976『栴檀山村史』

高岡徹　1990「増山城と中世の城館」『砺波市史資料編１　考古、古代・中世』　砺波市史編纂委員会

砺波市教育委員会　1978『富山県砺波市栴檀野遺跡群予備調査概要』

砺波市教育委員会　1998『平成９年度増山城跡総合調査概報　増山城跡Ⅰ』

砺波市教育委員会　1999『平成10年度増山城跡総合調査概報　増山城跡Ⅱ』

砺波市教育委員会　2000『平成11年度増山城跡総合調査概報　増山城跡Ⅲ』

砺波市教育委員会　1999『高遠向島遺跡』

砺波市教育委員会　2001『須恵末峠Ａ遺跡』

砺波市史編纂委員会・砺波市文化財審議委員会　1962『砺波市福山〈徳万赤坂〉須恵器窯発掘報告』

富山県　1992『10万分の１富山県地質図説明書』

富山市教育委員会　1984『白鳥城跡試掘調査概報（Ⅲ）』

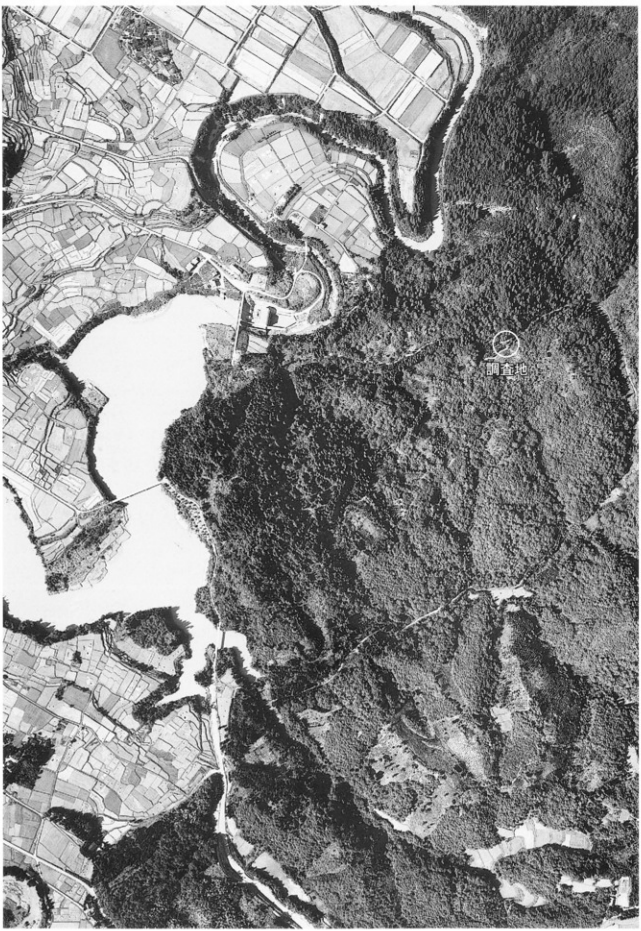
富山地学会編　1986『富山県の地形・地質』

西井龍儀　1990「第１章　旧石器」　『砺波市史資料編１　考古、古代・中世』　砺波市史編纂委員会編

西井龍儀　1994「利波郡における分窯とその背景」　『北陸古代土器研究』第４号

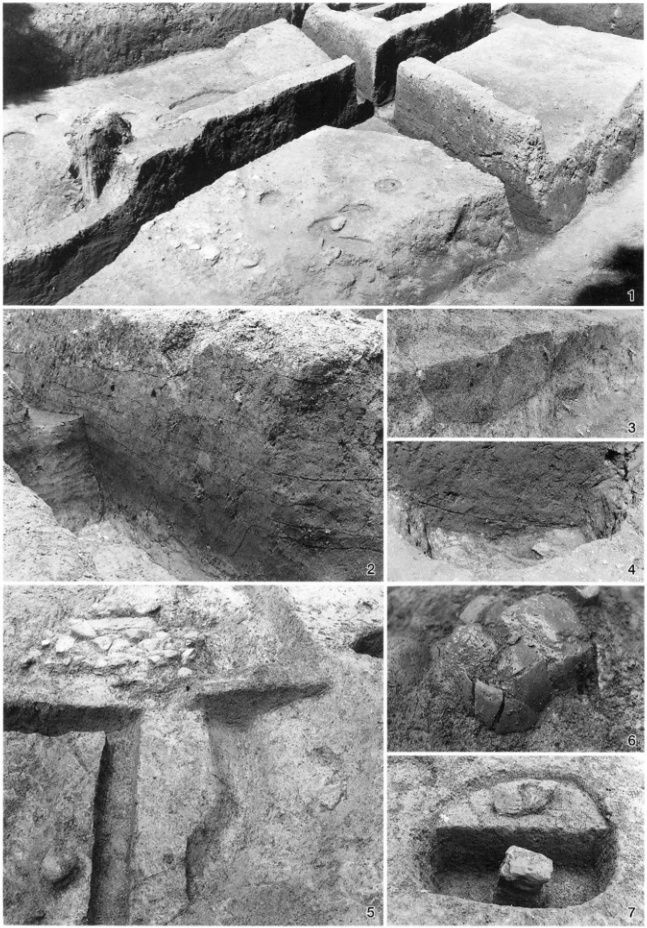
福岡町教育委員会　2002『木舟城跡発掘調査報告』

宮田進一　1997「第２節　越中国における土師器の編年」　『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会

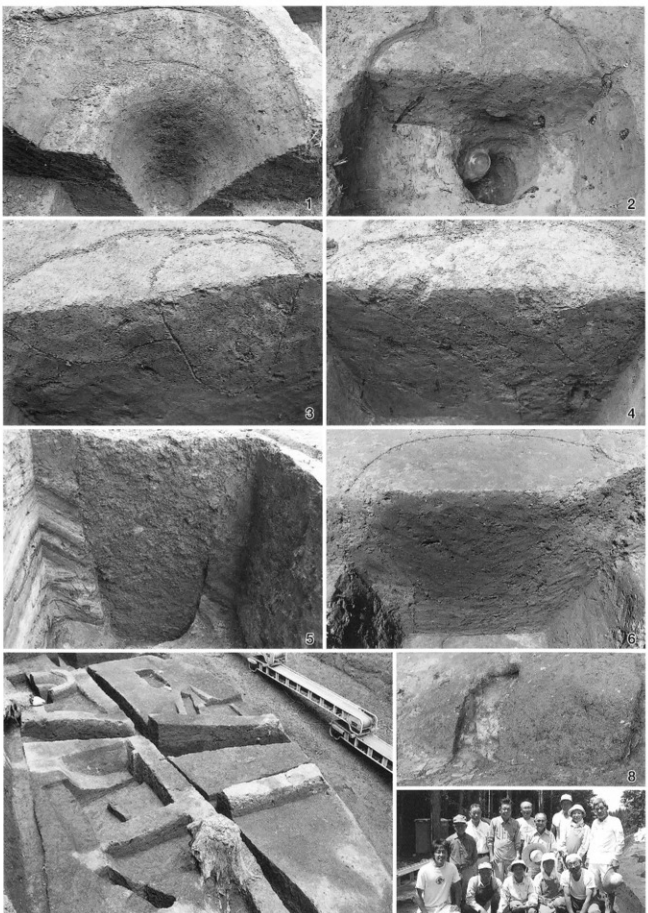


図版1　空中写真

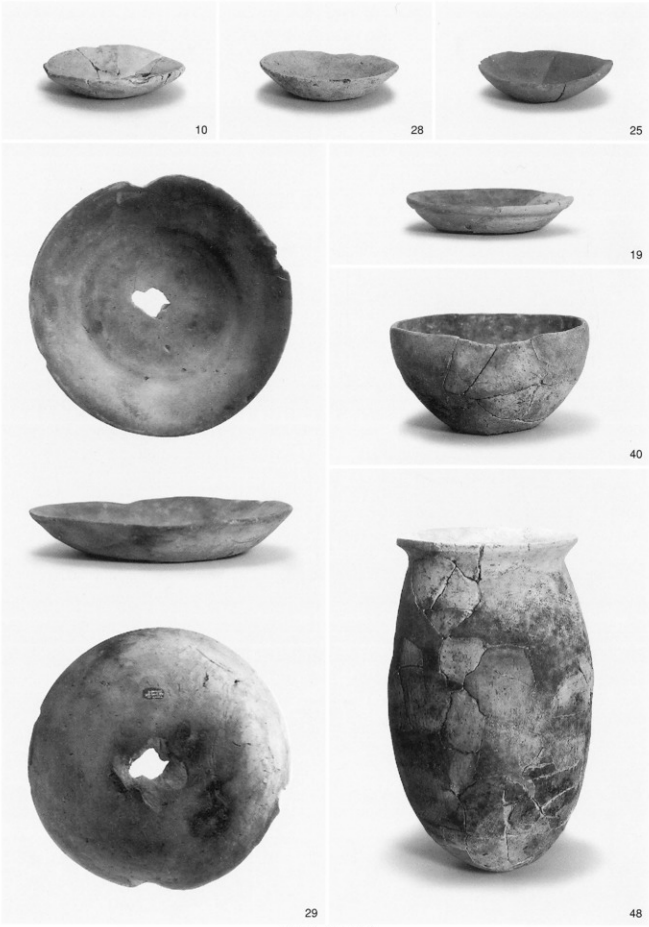
※この写真は国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真を複製したものである.（承認番号）平14北複、第293号



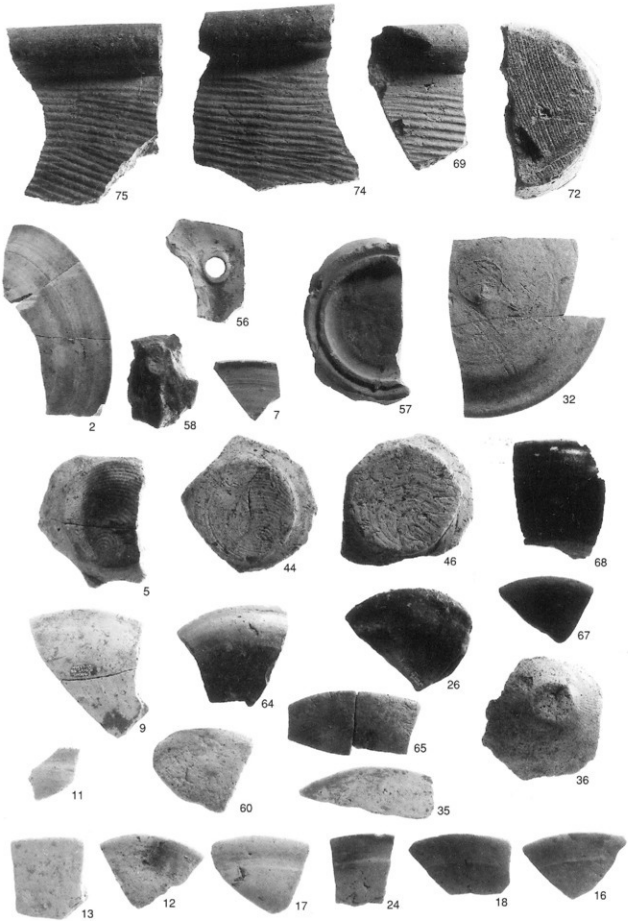
図版2　遺構(1)　1. 上層遺構全景　2. 調査区断面　3. C区断面　4. SK02　5. SK01　6. SK01土師皿出土状況　7. SP01



図版3　遺構(2)　1.SK01(SB01)　2.SK09(SB01)　3.SK13(SB01)　4.SK08(SB01)　5.SE01
6.SK07　7.竪穴建物群(SI01・02・03)　8.SK10　9.調査参加者



図版4　遺物(1)


75
74
69
72
2
56
58
7
57
32
5
44
46
68
9
64
26
67
65
36
11
60
35
13
12
17
24
18
16

図版5　遺物(2)

報 告 書 抄 録

ふりがな	とやまけんとなみし　ますやまじょうせきはっくつちょうさほうこくーりんどうますやまじょうせきせんかくふくこうじにともなうきんきゅうはっくつちょうさほうこくしょー
書名	富山県砺波市　増山城跡発掘調査報告 ―林道増山城跡線拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告書―
編著者名	野原 大輔　（砺波市教育委員会 生涯学習課　学芸員）
編集・発行機関	砺波市教育委員会
所在地	〒939-1398　富山県砺波市栄町7番3号　TEL0763-33-1111
発行年月日	平成15年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査原因
ますやまじょうせき	とやまけんとなみし ますやまあざたかつ ほりやま・ななつおやま			36° 39′ 05″	137° 02′ 52″	
増山城跡	富山県砺波市 増山字高津保理 山・七ツ尾山	162086	208001	調査面積 250㎡	調査期間 2002年 ５月７日 ～６月21日	林道増山城跡線の拡幅工事

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
増山城跡	城館	戦国時代 室町時代	掘立柱建物、周溝遺構、土坑、井戸、 ピット	土師器、珠洲、瀬戸美濃、	大型の掘立柱建物（方１間）が検出された。柱穴から底部穿孔の土師皿が出土。
		鎌倉時代 平安時代		土師器	
		平安時代 奈良時代	竪穴建物、炭焼き穴	土師器、須恵器	中世郭の下層から竪穴建物が検出された。
		弥生時代		弥生土器	市内の発掘調査において弥生土器が初めて検出された。

EXCAVATION REPORT OF THE MASUYAMA-JOSEKI

Copyright © Tonami Prefectural Board of Education
7-3 Sakaemati Tonami-City Toyama 939-1398 Japan

No parts of this publication may be reproduced or copied by any means
without prior permission of the copyright owner.

—林道増山城跡線拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告書—
富山県砺波市

増山城跡発掘調査報告

2003年3月31日発行

発行　砺波市教育委員会
〒939-1398　富山県砺波市栄町7番3号
TEL（0763）33−1111　FAX（0763）33−6828

印刷　中越印刷株式会社
〒939-1351　富山県砺波市千代147番地
TEL(0763)32−3026　FAX(0763)32−3027

Printed in Japan